

タイ国の上座部仏教について

——ウパサンパダー（具足戒授与）の儀式に随喜して——

駒澤大学講師 福田孝雄

タイ国有数の寺院ワット・パクナムのウポーサタ（布薩堂）の静まりかえった空間に戒師（和尚へウパツジャーヤ）の玲瓏にして凜とした音声が響きわたり、その前に謹んでうづくまる三人の日本の若き僧達の後姿が、宗教的感動に、僅かながらうち震えているように見える。

三人には、パーリ語の名が法名として与えられ、その名によつて銘々が呼ばれ、戒師が彼等を取り囲むように両側に坐している僧伽（サンガ）に向つて、今まきに行われようとしている

ウパサンパダーの儀式の執行を告示しているのである。

この三人とは、横浜善光寺第十五回留学僧の吉田日光師（日蓮宗）。パーリ語法名はサッダー・マンガラ。サッダーとは信仰の、マンガラは吉祥の意味である）、善光寺黒田老師の令息博志さん（パーリ語法名はウイリヤ・マンガラ。ウイリヤは努力精進の意味）、そして私事ながら私の長男智昭（パーリ語法名はサテイ・マンガラ。サテイとは正念の意味）である。

この感動的な釈尊の仏教教団以来の伝統あるウパサンパダーの儀式は、かつて若き日の善光寺住職黒田武志老師も、同じく体験し、その後の黒田老師の国際的仏教者としての活躍の原点となった極めて重要な意味をもっている。

今繰り広げられる現前の厳肅な儀式に黒田老師はかつての自らの体験を重ね合わせ、言葉に言い現わせない感動が、心身に満ち満ちているに違いない。傍らに坐する私の身体にもそれがひしひしと伝わってくるのを感じるのである。

善光寺派遣の三人の僧が、同時にウパサンパダーの儀式を盛大に執行されるようなことはおそらく他の日本仏教の寺院の一寺の行事として実現することは殆ど不可能なことだろうと思う。

今回のタイ国ワット・パクナムの訪問の旅は、善光寺黒田老師の国際仏教界に屹立する大山の如き存在を改めて認識するに至るものだったと感じている。

ウパサンパダーの儀式の実況の詳細なレポートは東郷氏に委ねることとし、以下簡略ながらタイ国上座部の仏教を管見することにした。

一口に南方仏教と言っても、地域的にはインドから東南アジア諸国全域に広く分布し根をおろしているが、その契機となったのは、インドのアソーカ王（梵）アシヨカ。阿育王と音写。即位はB.C.二六八年）のシリア、エジプト、マケドニア、キレーネ、エペイロス、スリランカなど諸地域に使節を派遣したことによる。この南アジア、東南アジアに広く定着した仏教はテーラヴァーダ（上座部・長老派）と称し、伝持する經典類はパーリ語聖典であり、教理的にも地域差は殆どないと言える。つまりスリランカ、ミャンマー、タイ国、ラオス、カンボジアの諸国は、このテーラヴァーダ仏教の精神を基盤とし、強いつながりをもっていると言って

もよい。

タイ国の場合、中国系の大衆仏教を除いて、宗教総人口の九〇%以上仏教徒である。一九六四年の公式発表では二三、三七八の寺院数と一五一、五六〇人比丘（男性僧）と八七、〇一〇人の沙弥（僧の候補者）、一、九四七人の比丘尼（女性僧）が存在していると言う。信教の自由は保障されているが国王はすべての宗教の保護者であり、国王自らが、仏教徒でなければならぬと憲法に明記されている。

タイ国の近代化に大きく貢献したモンクート王子は父王のラマ三世が一八五一年に逝去するや、二十七年間の僧院生活から黄衣を脱いで王座に就いてラマ四世となった。そして十七年間王位にあつて、タイ国近代化の基礎を築き、列強の植民地化の危機を回避するために重要な役割を果たしたことは史実に詳しく記録されている。現国王も自らワット・ボヴォニベーで出家生活

を体験されている。

タイ国の仏教はマハー・ニカーイとタンマユット・ニカーイの二派に分れ、大部分の寺院はマハー・ニカーイに属している。この両派ももちろんテーラヴァーダの仏教であるから、戒律を主とする仏教であり、教理的な差違はなく、多少の習慣上の相違のみであると言う。しかしマハー・ニカーイは自由派であり、タンマユット・ニカーイの方は厳肅派である。国王は教団の長として、サンガラージャ（サンガの王）を任命し、このサンガラージャとソムデットの称号をもつ僧とサンガラージャが任命する長老から構成される長老会議が仏教教団の統一と強力な組織を構成している。

仏教教団は手厚く保護を受けているが、政治的な事柄には関与しない。スリランカやミャンマーの教団が政治活動をするのに対して、タイ国の仏教教団が出世間的立場を維持し、必要に

応じて政府に意見を具申する程度にとどめ、政治活動をせず政治にタッチしないことがかえって教団の平穩が維持され、政治家を始め社会的指導層の尊敬を得ることになるのだろう。

タイの民衆は、元來宗教心が篤く、精靈(ピー)の信仰を有する。教育の普及や近代化によってピー信仰の形態や内容にも多少の変化がもたらされたとは言っても深く民衆の心に根ざし、信念として定着したものは簡単に消滅はしないだろう。都会の街角や近代的なビル街の空地には至る所にピーの祠が存在している。精神生活の体系の中で純粹な上座部を頂点とし、底辺をピーの信仰が支える形でパンテオンが構成されているのである。

またタイ国の仏教では、出家することも還俗することも自由である。仏教の本来の主旨に立つてみれば、出家することも還俗することも、あくまで本人の自由意志によるのであるから、他

による強制の必要はないと言える。出家して僧院生活で修行を体験し、そして還俗して世俗的社会生活において、自ら会得した仏教精神を實踐することも意義あることだとする考えである。つまり国王も出家生活を体験されるのだから、一般人もある一定期間修養し、人格を陶冶することが必要だとする立場であり、そのための機関として寺院が重要な役割を負っているのである。

社会の指導的立場にある人が僧院での修養を積み、世俗的生活の中で、在家仏教者として仏教精神を實踐することにより、社会の浄化や社会の改革向上に資することができれば、別の視点から仏教寺院の存在が評価されることだろうと思う。

タイ国の仏教寺院のあり方が仏教の近代化の一つの方向性を示していると言ってもよいのではないだろうか。